第1章

# 人間ではなく、パターンを考える

進歩への希望をあざ笑うのは極めつけの愚行であり、魂の貧しさと精神の下劣さの極致である。

――ヘンリー・ルイス・メンケン

一九九二年の夏、クロアチアのダルマチア地方の海岸にある都市、スプリトの小さな体育館でのことだった。ボスニアの内戦を逃れてきた難民が、信じられないような出来事を『ワシントン・ポスト』紙の記者ピーター・モースに延々と語っていた。格別変わったところのないごく普通の人々が突如として無慈悲な殺人鬼に変わるのを、目のあたりにしたというのだ。アデムという名の農民は、隣村のセルビア人たちが村の男三五人を捕まえて喉を切り裂いたと言った。「村人は殺害された」とモースはこのときのことを著書のなかで伝えている。「手を下したのは、それまで友だちづきあいをしていたセルビア人たちだった。前の年の秋には農場の収穫を手伝ってくれたし、ともに胸躍る体験や秘密を語りあい、暑い夏には真っ裸でドリナ川で泳ぎ、夜な夜な村の不良少女たちを連れてたむろした仲間だったのだ。それが突然、一見したところ何の理由もないのに、殺人鬼に変貌してしまった[1]」。

一九九〇年代の初めから中ごろにかけて、アデムと同じく、クロアチア、ボスニア、コソヴォを逃れ

てきた何千人もの難民が同じような話をしていた。突然、隣人が隣人に、友人が友人に襲いかかったというのである。

内戦が終わってから、担当部局の職員たちがクロアチアの小さな都市ヴコヴァルに住む一人の男性に聞き取り調査を行なった。男性は近隣のセルビア人たちのことを「みんな友だちだった」と振り返り、「嬉しいことも悲しいことも、ともに分かちあったものだった」と語った。その後一九九一年になると、悪意に満ちた憎しみの暗い影が街を覆った。かつては変わることのない好意のしるしだった隣人どうしの挨拶は、徐々に民族の同一性と結束を象徴する露骨な表現に変質し、「仲間」を「やつら」から区別する手段になった。「だれもがついこの間まで親友だった連中から身を守ろうとするようになった。やつらはもう会釈すらしないも同然だった。もはや友人でいようなんていう気はさらさらなかったんだろう」と男性は述懐している。

このような事件――残念ながら、人類の歴史ではきわめて頻繁にお目にかかる――に恐怖と当惑を覚えるのは、それが取り立てて言うような原因もなしに出来するように見えるからである。安定していると思われていたものが、ある日突如としてすべて崩れ去り、人は見まちがいかと思うほど様変わりし、事件の影響を受けて想像もできなかったような行動に駆り立てられる。まるで得体の知れない力が突然、制御不能になって、だれ一人、善意によってすら事件が引き起こした潮流を押し止めることができないかのようである。

ドイツ生まれのセバスチァン・ハフナーは著書『ナチスとのわが闘争』のなかで、ナチスを敵視して

いた自分が否応なくその活動に引きずり込まれた経緯を振り返っている。一九三〇年代半ば、威圧を目的に組織された集団である突撃隊は、通りを行進する際、ナチスの旗に敬意を表しようとしなかった者をだれかれなく殴りつけた。自分なりの些細なやり方で反抗していたハフナーは、たいていは戸口に身を隠してやり過ごしていた。だが、ハフナーらの法学生が洗脳のためのキャンプへの入営を命じられたとき、気がついてみると、彼も突撃隊と同じ褐色のシャツを着て、あの行進に加わっていたのだ。「抵抗は自殺の一形態だっただろう」とハフナーは書いている。こうして、抑圧される側だったのが、図らずも抑圧する側に回ってしまったのである。

われわれが村々を通ると、道の両側に並んだ住民たちは腕を高く上げてナチスの旗に敬意を表わすか、もしくは一目散に家の玄関に身を隠した。こんなことをするのは、そうでもしなければわれわれ、つまりは私に殴られると知っていたからである。旗を押し立てて行進する気などなかったときは、私も――行進に加わっている他の連中も間違いなく――旗をやり過ごそうと玄関に逃げ込んでいたのに、そんなことはまったく問題ではなかった。いまではわれわれは、見ている者すべてに対して、暗黙のうちの暴力による脅しを体現していた。彼らは旗に敬意を表するか、もしくは身を隠した。われわれへの恐怖からだ。私を恐がっていたからだ[2]……。

あらゆる点で正常なごく普通の人々を、いったい何が集団的狂気に追いやってしまうのだろう。ボス

ニアやナチス・ドイツ下での出来事、政権を掌握していたフツ族の過激派民兵組織が一〇〇日足らずのうちに九〇万人のツチ族を殺害した一九九四年のルワンダでの出来事などを取りあげる際に、「狂気」という言葉を使うのがほんとうに当たっているのだろうか。このような出来事を説明するには、人間心理の予測のつかない変化や、人の常である道徳的欠陥を持ちださなければならないのだろうか。それとも、さらに不安を覚えることになるかもしれないが、もっとはっきりした原因があるのだろうか。

インドの人口が五億人を突破した一九七四年、インディラ・ガンジーを首班とする政府は、いまこそ思い切った措置をとるべきだと決意した。保健相は当時、「ありとあらゆる手段を試みてきたが、いまやその最終章に突入した」と述べている。保健相は、「パイプカットのための野営施設」を全国に建設中で、新たな法律に従って、子どもが三人いる男性はこれらの施設に報告されて不妊手術を受けることになると発表した。「自分から進んで」手術を受けない場合は、拘束して強制的に処置するという。手術を強要するために、警察は食糧配給券を渡さなかったり、医療機関での受診を制限したり、運転免許証の交付を保留したりした。ある村では、警官たちが一人の男性に対して、お前の女房がもう子どもを産めない齢でも、お前がパイプカットを受けなければ店を焼き払ってやると脅した。一年間だけで八〇〇万人を超す住民が不妊手術を受けさせられた。

けれどもすぐに、ガンジー政権がつづけている戦いは社会の意向に逆らうもので、国民を慣習や信条、さらには各人の願いとは反対の方向に追いやろうとしていることが明らかになった。激しい抗議が

わき起こるなか、政府は計画を放棄せざるをえず、インドの人口は一貫して増えつづけた。インドでは現在もなお人口が増加している。実際、全国いたるところで増えているが、唯一、南端部に位置するケーララ州だけは例外で、ここはインド社会における奇跡的な事例となっている。野蛮な行為も強制も組織的な広報活動もなかったのに、ケーララ州はどういうわけか、インドの他の地域ができなかったことを成しとげたのである。

ケーララの住民の大半は農民で、米や茶、あるいはカルダモンや胡椒などの香辛料を栽培しながら、かつかつの生活を送っている。一般的な住民が所有する調理器具は数点にすぎないし、所得は平均的なアメリカ人の七〇分の一にもならない。それでも、ケーララの住民の平均寿命はほぼ七二歳とアメリカの平均寿命に近く、しかもインドの他の地域では人口が急増しているのに、この州の人口は安定している。戸惑いを覚えるのはここである。経済的にも社会的にも、ケーララはインドの他の地域と大差ないように見える。他の地域より豊かなわけでもないし、土地が肥えているわけでもない。どうすればこれほどの違いが生じるのだろう。

ケーララに他地域との違いをもたらしている事情の一つに教育がある。想像されるような産児制限や家族計画の教育ではなく、読み書き算術の教育全般、それも特に女性に対するこれらの教育である。一九八〇年代後半、ケーララ州政府はボランティア団体の支援を受けて、ケーララの非識字者を完全に一掃する大々的な取り組みに着手した。文字どおり何万人ものボランティアが州内を東奔西走し、ようやくのことで一五万人を超す非識字者を探しだした。その三分の二は女性だった。ついで、少人数の教師

で編成されたボランティアのグループが、彼らの基礎教育に乗り出した。この取り組みを率先した人物は『ニューヨーク・タイムズ』紙に、「授業をしたのは牛小屋や野外や中庭だった」と語っている。

三年後の一九九一年に国連は、ケーララは唯一、識字率が一〇〇パーセントの州であると宣言した。しかもこの注目すべき成果は、人口の増加に大きな影響を与えたように思われる。インドの家族計画の専門家が一九九九年に述べているように、「子どもが三人以上いると、いまではばつが悪そうに口にする……七、八年前なら標準は子ども三人で、それでもわれわれは計画が順調に進んでいると考えていた。現在では標準は子ども二人で、教育水準がもっとも高い人々の間では一人である」。

経済学者と社会学者たちはいまでは、女性の教育が巨大な風船のように膨張しつづける人口――何千年もの間、一貫して増加しつづけてきた――に歯止めをかける特効薬になることを認めている。だが、どうしてなのだろう。産児制限や家族計画の取り組み、さらには強制的な不妊手術の計画さえ不首尾に終わっているのに、教育は実効を上げてきた。女性が新聞を読んだり日記をつけたりするようになり、一〇〇以上の数を数えることも三桁の掛け算もできるようになると、なぜこれほどの違いが生じるのだろう。

## パターンで考える

本書の中核をなす考え方は、突然わき起こる民族主義の高まり、女性の教育と産児制限との特徴的な

つながり、さらには根強く残る人種間の分離をはじめ、金融市場や政治、ファッションの世界で見られる重要もしくは純粋に興味をかき立てられる多くの社会現象を理解する唯一の手立ては、人間ではなくパターンを考えることだというものである。社会的世界が複雑なのは人間が複雑だからだとする従来の考え方がある。多くの人は、人間世界を物理学や化学の理論に負けず劣らず確実な理論で理解することができないのは、そのためだと考えている。原子は単純だが人間は違うというわけで、話はここで終わってしまう。本書では、こうした考え方がなぜ大いなる誤解なのか、その理由を明らかにしたいと思う。人間は複雑で理解しがたい場合もあるが、手に負えないというわけではない。

車を運転する人なら、高速道路を走っていてイライラした経験があるはずだ。はっきりした理由もないのに、急に流れが悪くなって止まってしまう場合である。三〇分ものろのろと進みながら、前を走る「間抜けども」に悪態をつき、渋滞の原因を懸命に探ろうとする。だが、事故は起きていないし、故障した車もなければ道路工事をしている作業員の姿もない。やがて突如として渋滞を抜け、流れはふたたび順調になる。道路交通の専門家が自然渋滞と呼んでいるこの現象は、交通量が増えすぎれば、あらゆる道路で自然に生じる基本的なパターンである。運手者（ドライバー）は周囲の状況にそれほど素早く反応できず、道路が混みあって車間距離が短くなるにつれ、反射神経ではもはや対処できない事態が生じてしまう。原因が何であろうと、車が集中すれば交通の流れは遅くなりがちである。そのためにさらに車が集中してますます流れが悪くなり、それがなおさら車を集中させてしまう。こうして渋滞が出現する。ひとりでに生じてしまうのだ。

大きな抗議集会やコンサートが開かれている広場に行けば、車の渋滞とは似ても似つかないように見えながら、概念的には渋滞の場合と非常によく似た状況に出くわす。よく見ていると、人で埋めつくされた広場をどのようにして通り抜けていくかは、実際には通り抜けようとしている個々の人の意図よりもパターンに関係していることがわかる。みな他の人とぶつかるのを避けようとしてだれかの後についていくが、その人もまた別の人の後を追っているので、統一のとれた移動の流れが自然にできてくる。あなたの両隣の二人はあなたと同じ方向に移動しているが、はるか向こうでは人の流れは逆になっている。こうした流れに入って移動するのには、もっともな理由がある。逆方向に進むのははるかに骨が折れるからである。この利点があるために、どんな流れもすぐにさらに多くの人を引き寄せて合流させ、太い流れとなってますます多くの人を引き寄せるようになる。パターンが各人の選択の幅を狭め、ほぼ確実に個々の人々に、パターンをいっそう強力なものにして勢い（エネルギー）と影響力を増大させる行動をとらせてしまうのである。

単純な状況下とはいえ、これらの例は個々の人間の願望と社会的帰結との間に奇妙で複雑なつながりがあることを示している。渋滞を引き起こしたいと思う人などいるはずがない。世界中の道路で日々の悩みの種となっている自然渋滞に関して言えば、ドライバーのだれかを名指しして、マナーの悪さが渋滞を引き起こしたと非難することさえできない。同じように、群集のなかのだれ一人として、率先して移動のための流れを作ろうとするわけでもないし、どっちに行けばいいかを決めているわけでもない。ごちゃごちゃの混乱状態から自然にパターンが出現し、独自のエネルギーと力強さを獲得するようにな

る。決められた型どおりの動きをする振り付けそっくりなのに、ここには振付師はいない。蛇行した遠回りの経路をとって人々が向かう先は、おそらく、実際にはだれも行きたいとは思っていない場所になってしまうだろう。だれかの願望が反映されているわけではなく、全員の願望の間をとったものさえ反映していないのである。

二〇〇四年、アメリカ国民は公開された写真を見てぼう然とした。そこには、バクダッド郊外のアブグレイブ刑務所で、アメリカ兵がイラク人囚人に残酷な拷問と陵辱を加えている姿が写っていた。兵士たちは女性も男性も、アメリカ各地のふつうの高校と大学で学んだふつうの若者だった。そんな彼らが無防備の囚人たちを常習的に辱めたり殴りつけたりする行為に楽しそうに加わるなど、とうてい信じられないことのように思われた。それでも、なるほどと思える説明を見つけるのは、実際にはそれほど難しくない。この事件に密接に関係しているのは、道徳的に欠陥のある人々ではなく、始末に負えないパターンなのである。いまから三〇年ほど前、スタンフォード大学のフィリップ・ジンバルドと同僚の心理学者たちは、ごくふつうの大学生たちを募集し、実験のなかで、彼らを心理学科の建物の地下室に作った刑務所そっくりの状況下においた。一部の学生が囚人になり、残りは看守役を演ずることになっていた。研究者たちは囚人役の学生の普段着を脱がせ、制服を与えて番号をつけた。看守には銀色に反射するサングラスと、属性を示す「刑務官殿」などの名前を与えた。ジンバルドらの研究者の目的は、学生たちから個人の人格という虚飾をはぎ取って、状況そのものがどんな結果をもたらすかを確かめることにあった。以下は、ジンバルドが述べた実験の経過である。

囚人たちが抱く反感、囚人の虐待、さらに囚人たちの精神的消耗の度は、日を追うごとにますますひどくなった。三六時間も経過しないうちに、最初に囚人の一人が情緒不安定になり、泣き叫んだり金切り声をあげたり理不尽な考え方をするようになった。この学生は解放しなければならず、以後、ひどいストレス反応のために、毎日一人また一人と囚人を解放していかざるをえなかった。調査は二週間つづけることになっていたが、六日が経過した時点で中止したのは、文字どおり制御が効かなくなってしまったためである。正常で健康であることを理由に選んだ若者たちが感情を抑えられなくなっていた。非暴力主義の若者たちが残酷な振る舞いをつづけ、むごくて非道な罰を囚人に科すことに喜びを感じていた。

ジンバルドは近年、アブグレイブでの事件はこれと同じパターンをたどったと論じている。この事件は個々の兵士ではなく、むしろ彼らがおかれていた状況と関係があるというのである。[3] 多くの写真に写っている兵士たちは軍服を着用していない。所属や階級を示すものをもたない彼らは、心理学的に言えば匿名の存在となり、「看守」として「脱個性化」されていたのだ。「政治犯」や「テロリスト」といった人間性を取り去ったレッテルが、囚人たちは価値のない劣った存在だという認識をもたらしたのに加えて、責任の所在の曖昧さのために、夜間には刑務所の管理がほとんど行なわれていなかった。こうしたことが原因になって、どんな状況下でも虐待が確実に生じるとは言えないかもしれないが、虐待が広がって継続していく状況をお膳立てすることは確かである。より多くの兵士たちが囚人を虐待するよう

になればなるほど、彼らはますます、囚人は人間以下で虐待して当然だと見るようになる。

ここでもう一度、旧ユーゴスラヴィアでの出来事や、単に教育を施すだけで人口増加を抑止できたケーララ州の経緯について考えてみよう。人間のことはいっさい忘れてパターンについて考えれば、これらをはじめとする同じような出来事が、必ずしも非常に不可解に見えるとは限らないことがわかってくる。あとで詳しく調べるが、民族間の憎悪や不信感は自己増殖することがある。それどころか、原始的な社会・経済状況のなかでは、協調という人間の行為の根底にある論理のために、文化、宗教などの外見的な点で異なる人々への盲目的な不信感が、共同体独自の一体性を築くための有効な道具になりうる場合さえあるように思われる。そのような一体性が外部からはどれほど不快で有害に見えようとも、事情はまったく同じである。このあと見るように、数学を使った簡単な分析からは、自民族中心主義のぞっとするようなパターンには自らの力だけで展開していくエネルギーのようなものがあり、大多数の人はどうやってもその勢いに抗えないことが明らかになる。では、ケーララでの教育についてはどうだろう。過去五〇年、西欧諸国では、女性が教育を受けるようになるにつれて出生率が徐々に低下してきた。このこと自体は大して不可解ではない。女性たちは教育のおかげで、家庭の外に、仕事などの別の関心の対象を探すことができるようになるからである。ケーララの事例で非常に奇妙に思えるのは、変化が突然生じたことだ。しかし、このケースでも、理解するための鍵は、やはりひとりでに力強さを増していくパターンにあるように思われる。人は世間から隔絶して暮らしているわけではなく、他人の行動の影響を受けないということはありえない。周りがみな教育を受けるようになり、教育が暮らしを左